

宿題を忘れたら女子も全裸で廊下に立たされる！

都内のとある私立中学校の2年B組教室は、数学の授業が終わったばかりのざわめきに満ちていた。窓から差し込む陽光が、埃の粒子をきらめかせ、黒板に淡い影を落としている。机には教科書やノートが散乱し、誰かが落とした消しゴムが床に転がっていた。生徒たちは友達と笑い合ったり、鞆に荷物を詰めたりしていたが、その喧騒は、担任の山本先生の鋭い声によって一瞬にして途切れた。

「岸、こちらへおいで」

山本先生の声は低く、冷たく、まるで氷の刃のように教室を切り裂いた。教卓に立つ彼の背筋はピンと伸び、メガネの奥の目は、獲物を捉えた猟師のように光っている。岸菜摘は、窓際の席で友達と話していた手を止め、ゆっくりと立ち上がった。制服のスカートを握る手が、汗で湿っているのに気づいた。菜摘の心は、まるで嵐の前の海のようにざわめいていた。「宿題忘れたからだ…」菜摘はなぜ自分が呼ばれたのか自覚があった。

菜摘は教卓に向かって歩きながら、クラスメイトの視線を肌で感じた。右側の席で、いつも落ち着いた雰囲気

気のクラス委員、佐藤彩花が、不安そうに彼女を見ている。彩花の長い黒髪が、陽光に照らされてつややかに揺れ、頬に微かな紅が差していた。左側の席では、大人しい小林真由がノートを閉じながら、ちらりと菜摘を見上げた。真由の丸い目は潤み、唇が小さく震えているようだった。後ろの席では、高橋玲奈が「え、菜摘、なに？」と小さく呟き、眉をひそめた。彼女の声には、菜摘を案じる温かさと、かすかな苛立ちが混ざっていた。

「岸、宿題はどうした？」

先生の声は、まるで冷たい水がかかるように教室に響いた。菜摘は教卓の前で立ち止まり、うつむいたま

ま、「す、すみませんでした...忘れました」と答えた。声は震え、喉の奥で詰まるようだった。昨夜、SNSで友達と長時間チャットしてしまい、数学の宿題のことなど頭から消えていた。後悔が胸を締め付け、心臓がドクドクと鳴る。昨日、スマホの画面で笑い合っていた自分が、まるで別人のようだった。菜摘の頭は、「なんで忘れたの？バカバカバカ！」と自分を責める声でいっぱいだった。

「忘れた、か。2回目だな」

山本先生はゆっくりと口角を上げ、ため息とも嘲笑ともつかない音を漏らした。メガネのレンズが光を反射し、菜摘にはその目が見えない。だ

が、その視線が肌を刺すように感じられた。クラスメイトたちのざわめきが再び始まり、誰かが「菜摘、ピンチじゃん」と囁く声が聞こえた。菜摘の耳が熱くなり、顔がカッと火照る。首筋に冷や汗が伝い、セーラー服の襟が肌に張り付く感覚があった。羞恥と恐怖が、彼女の心をじわじわと蝕んでいた。

「ルールは知ってるな。宿題を忘れた生徒には、罰がある」

菜摘の心臓が跳ねた。山本先生の「罰」は、ただ厳しいだけではない。どこか異様な執念を感じさせるものだった。以前、宿題を忘れた生徒が校庭を走らされたり、教室の前で立たされたりした話を思い出す。

だが、今日の先生の声には、いつもと違う艶めいた響きがあった。まるで、菜摘の反応を味わい、彼女の羞恥を愉しんでいるかのように。菜摘の胸は、恐怖と、どこか言い表せないざわめきで締め付けられた。

「廊下に出なさい。全裸で」

その言葉は、教室に冷たい風を吹き込んだ。一瞬、誰もが息を止めた。菜摘の頭は真っ白になり、耳鳴りが響く。「え...何ですか？」と掠れた声で聞き返すと、先生は目を細め、「冗談じゃない。服を全部脱いで、廊下に立つんだ」と繰り返した。声には有無を言わさぬ力が込められ、菜摘の膝がガクガクと震えた。彼女の心は、まるで奈落の底に突き落と

されたようだった。「全裸？うそ、うそでしょ？そんなの無理...無理！」と頭の中で叫び、身体が硬直する。

教室がざわめきに包まれる。後ろの席の男子、斎藤亮が「うそ、マジ！？」と叫び、ニヤリと笑った。窓際の彩花は目を大きく見開き、手で口を覆う。彼女の頬が紅潮し、指先が震えているのが見えた。真由はノートから顔を上げ、信じられないといった表情で菜摘を見つめる。彼女の目は潤み、唇が小さく開いていた。玲奈が「先生、ふざけないでください！」と立ち上がり、拳を握るが、先生は「黙れ、高橋」と冷たく一蹴。玲奈は悔しそうに唇を噛み、

席に座り直した。彼女の目には、菜摘への同情と、先生への怒りが滲んでいた。

菜摘は「そんな...無理です...お願いします」と呟いたが、声はか細く、先生の耳には届かない。先生は腕を組み、「早くしろ。さもないと停学だぞ」と言い放つ。停学という言葉が、菜摘の心をさらに追い詰めた。両親の失望した顔が脳裏に浮かび、胸が締め付けられる。母親の泣きそうな目、父親の怒った声。家に帰れなくなる恐怖が、菜摘の抵抗を砕いた。彼女の心は、「嫌だ、嫌だ、でも...停学になったらもっと...」と葛藤で引き裂かれ、身体が勝手に動く。

「脱ぎなさい。今すぐだ」